レジュメ

子どもと文化を架け渡す絵本

石井　光惠

子どもたちは成長するにつれ身のまわりの世界から、自分が将来生きていく広い社会へと目を向けていきます。その社会に生きる必須アイテムは、まず人としての文化を身につけることでしょう。その際の手助けとして、絵本は子どもたちにどのような体験を提供できるか、幼い子どもたちになじみの深い物語絵本を中心に考えます。

１．平成の絵本動向から

① パラダイムの転換から始まって、懐深い絵本のすきまを旅した時代

・2000 年以降の日本の古典芸能や古典文学からの絵本化を狙った「和」テイスト絵本の出版
（日本昔話絵本、落語・狂言・歌舞伎等日本の古典芸能・古典文学を題材とした絵本、怪談絵本、妖怪絵本、えほん遠野物語）

「いまむかしえほん」シリーズ　広松由希子／文　岩崎書店　2009 年～
「日本の昔話えほん」シリーズ　山下明生／文　あかね書房　2009 年～
「日本名作おはなし絵本」シリーズ　小学館　2009 年～
『ばけものつかい』川端誠／作　クレヨンハウス　1994 年　落語絵本シリーズ
『ねぎぼうずのあさたろう』飯野和好／作　福音館書店　1999 年 日本傑作絵本シリーズ
『仮名手本忠臣蔵』橋本治／文　岡田嘉夫／絵　ポプラ社　2003 年
橋本治・岡田嘉夫の歌舞伎絵巻シリーズ
『がまの油』齋藤孝／文　長谷川義史／絵　ほるぷ出版　2005 年
声にだすことばえほんシリーズ
『ごびらっふの独白』草野心平／詩　齋藤孝／編　いちかわなつこ／絵　ほるぷ出版　2007 年
声にだすことばえほんシリーズ
『ぶす』もとしたいずみ／作　ささめやゆき／絵　講談社　2007 年
講談社の創作絵本　狂言えほんシリーズ
『ぶす』内田麟太郎／文　長谷川義史／絵　ポプラ社　2007 年　狂言えほんシリーズ
『権大納言とおどるきのこ』ほりかわりまこ／作　偕成社　2009 年　今昔物語絵本シリーズ
『本所ななふしぎ』斉藤洋／文　山本孝／絵　偕成社　2009 年　（怪談）
『のっぺらぼう』杉山亮／作　軽部武宏／絵　ポプラ社　2010 年
杉山亮のおばけ話絵本シリーズ
『悪い本』宮部みゆき／作　吉田尚令／絵　東雅夫／編　岩崎書店　2011 年
怪談えほんシリーズ

『いるのいないの』京極夏彦／作　町田尚子／絵　東雅夫編　岩崎書店　2012 年
怪談えほんシリーズ
『ことりぞ』京極夏彦／作　山科理絵／絵　東雅夫／編　岩崎書店　2015 年
京極夏彦の妖怪えほんシリーズ
『かっぱ』柳田国男／原作　京極夏彦／文　北原明日香／絵　汐文社　2016 年
えほん遠野物語シリーズ

② 荒井良二からヨシタケシンスケまで

ヨシタケシンスケ：「かつての僕みたいに『絵本が描ける気がしない』という人が、じゃあ何ならできるのかを探すことが絵本の間口を広げるきっかけだろうし、そのすきまがすごく空いている世界のはず。すきまをみんなで探すことが、絵本の可能性を広げていくことだと思うんです」『月刊 Moe』2018 年 1 月号　「絵本作家特集 2018」　p.18

『バスにのって』荒井良二／作　偕成社　1992 年

『りんごかもしれない』ヨシタケシンスケ／作　ブロンズ新社　2013 年

2．子どもたちの社会的成長を支える絵本

① 絵本のすきまに対して、絵本の王道をどう考えるか

・『としょかんライオン』ミシェル・ヌードセン／作　ケビン・ホークス／絵
福本 友美子／訳　岩崎書店　2007 年
この絵本が、紹介されたとき、正に王道という印象を強く持った。当時も評判になった絵本。子どもに語るべきことがしっかり語られ、上質なユーモアが楽しまれている。

・絵本は、子どもたちの身体の発達、言語や認知、情緒や自我、社会性の発達などにより添って、その時々に応じて幅を広げていくメディア。

・絵本は子どもにとって、一つの経験となりうるもの。

② 子どもたちと絵本の関係から

(1) まだ未来の見えない子どもと信頼でむすばれるために―「絆」づくり

・いつも守ってくれる人がいるという信頼感。この信頼感が「絆」というもので、将来の人間形成の土台となるものである。

・その絆が赤ちゃんに生まれるためには、世話をしてもらうと同時に、やさしく語りかけてくれる言葉が必要。

・絵本の言葉が楽しいときに繰り返し読まれることで、子どもの心に安心の心地よさや愛情のぬくもりが届けられる。

・一緒に遊ぶ絵本も重要で、絵本を介して同じものを見、同じ楽しさを味わうという身体を通した共感性を大切にしていくのもこの時期の絵本の役目。

『いないいないばあ』松谷みよ子／文　瀬川康男／絵　童心社　1967 年
『きんぎょがにげた』五味太郎／作　福音館書店　1982 年
『くだもの』平山和子／作　福音館書店　1981 年
『こちょこちょこちょ』内田麟太郎／文　長野ヒデ子／絵　童心社　1996 年
『しろくまちゃんのほっとけーき』森比左志・和田義臣／作　若山憲／絵 こぐま社 1972 年
『じゃあじゃあびりびり』まついのりこ／作　偕成社　1983 年
『ぷくちゃんのすてきなぱんつ』ひろかわさえこ／作　アリス館　2001 年
『だるまさんが』かがくいひろし／作　ブロンズ新社　2008 年

(2) 葛藤を抱える幼い子どもたちとともに―しつけ・基本的生活習慣、人間関係のはじまり

・基本的な信頼関係ができて 1－2 歳になっても、子どもは自分の欲求や希望が満たされないと、かんしゃくを起こすのが普通で、それは未来への感覚がないからだと言われている。いつかは大丈夫になるという安心して未来を待てる感覚、つまり未来への想像力を育てるためにも、繰り返し読まれる絵本は大切な役目を果たす。
・大好きな人から「ダメ！」と言われるしつけ。断乳、トイレット・トレーニングなども、まずは越さねばならない大きなしつけの葛藤。
・自分のひとり占めだった愛情を弟や妹に分かたなければならない葛藤。
・また、兄や姉と競い合わなければならない葛藤。思い通りにならない葛藤。さまざまに戸惑う子どもの心に、絵本はそっと寄り添う。

『フランシスのいえで』ラッセル・ホーバン／文　リリアン・ホーバン／絵　松岡享子／訳　日本パブリッシング　1972 年
『テイッチ』パット・ハッチンス／作　石井桃子／訳　福音館書店　1975 年
『ピーターのいす』エズラ・ジャック・キーツ／作　木島始／訳　偕成社　1969 年
『すえっこおおかみ』ラリー・デーン・ブリマー／文　ホセ・アルエゴ＆アリアンヌ・デューイ／絵　まさきるりこ／訳　あすなろ書房　2003 年

(3) 子どもの成長にひそむ大切なワイルドさと想像力―自分の回りの環境を、コントロールしていく力をつける

・絵本は、子どもの成長にとって欠かせないあることに気づかせてくれる。人間が成長するときに経験する、自分の心の奥底にあるワイルドさの克服といえるものである。
・子ども自身でも解決のつかない、心の内側から湧き起こってくる野性といったそのワイルドさと、どう折り合いをつけて静めるか。
・特徴的なのは、心の闇を抜ける手段としてファンタジーを使用していることである。日常の現実と非日常の虚構が交差して物語が営まれ、その物語を生きることで人は成長していくことを絵本は語る。

『かいじゅうたちのいるところ』モーリス・センダック／作　神宮輝夫／訳 冨山房 1975 年
『おしいれのぼうけん』古田足日／作　田畑精一／絵　童心社　1974 年

(4) 子どもが実感する自己の成長の喜び―自立への憧れ　と　自立できたときの充足感

・大きくなる、いろいろなことができるようになる、周りをコントロールできるようになるということに、あこがれ続けているのが子ども。
・絵本は、子どもの成長を読者の子どもに実感させるものであり、子どもが自分を見つめ直すものにもなっている。泳げるようになったり、嫌いな食べ物を克服したり、縄跳びが跳べるようになったりと、些細な自分の日常が輝いて見えることだろう。

『はじめてのおつかい』筒井頼子／作　林明子／絵　福音館書店　1977 年
『ちいさなヒッポ』マーシャ・ブラウン／作　うちだりさこ／訳　偕成社　1983 年

(5) 社会的現実と向き合う子ども

＜仲間集団との関係で社会を知る＞

・年齢が上がって、集団生活を送るようになると、子どもは子ども同士の社会に目を向けるようになる。

＜家庭の問題で社会の矛盾と出会う＞

・望むと望まないにかかわらず、子どもはおとなの事情に巻き込まれていく。貧困や親の離婚の問題、社会的差別や戦争など、おとな社会には理不尽なことが多い。自分ひとりの問題ではなく、社会の問題にも、子どもは次第に目を開かれていく。

『すきですゴリラ』アントニー・ブラウン／作　山下明生／訳　あかね書房　1985 年
『パパのカノジョは』ジャニス・レヴィ／作　クリス・モンロー／絵　もん／訳　岩崎書店　2002 年

＜広い大人の社会へと目を開いていく＞

・十歳を越えるころには、人はどうあるべきか、社会はどうあるべきかと、自分を含め人びとを幸福にするものに関心を寄せるようになってくる。
・絵本を通して、正義を守るために、人は人や社会とどう向き合わなければならないかを、子どもたちは学ぶことだろう。人権への意識なども育つに違いない。

『ローザ』ニッキ・ジョヴァンニ／文　ブライアン・コリアー／絵　さくまゆみこ／訳　光村教育図書　2007 年
『なぜ戦争はよくないか』アリス・ウォーカー／文　ステファーノ・ヴィタール／絵

長田弘／訳　偕成社　2008 年

『おとうさんのちず』ユリ・シュルヴィッツ／作　さくまゆみこ／訳　あすなろ書房　2009 年

(6) 子どもの身の回りの自然への気づきと関心　⇒　科学する心を育てる

・子どもは成長すると、自分の身の回りで起こっているさまざまな現象に関心を向けるようになる。その現象の一つに自然科学がある。「不思議…」「どうして…」と考える心を育て、知的な興味関心に応えるものとしての絵本もある。

・認識絵本とか、知識絵本、科学絵本と呼ばれる分野の絵本で、これらの絵本が子どもたちの成長発達に果たす役割も大きい。幼い子では、数やことば遊びの絵本、モノの絵本（カタログ的にモノが紹介される絵本）などに関心が高く、小学校低学年から中学年にかけて、自然科学への関心が高くなると言われている。

「知りたい」、「わかりたい」という、幼い子どもたちの要求に応えることができるのも、絵本の特質だろう。

『かわ』加古里子／作　福音館書店　こどものとも 1962 年　傑作集 1966 年

『こいぬがうまれるよ』ジョアンナ・コール／文　ジェローム・ウェクスラー／写真
坪井郁美／訳　福音館書店　1982 年

『つちはんみょう』舘野鴻／作　偕成社　2016 年

『雑草のくらし』甲斐信枝／作　福音館書店　1985 年

『あさがお』荒井真紀／作　金の星社　2011 年

『すっぱりめがね』藤村賢志／作　教育画劇　2017 年

３．総括　―　絵本と子どもの原点にかえって

・絵本は繰り返し読まれ、子どもの心に大切なことを蓄積させていくメディアである。

・絵本は子どもにとって、体験・経験となるものである。
もちろん、実体験ではないが、主人公とともに想像上で体験していくことができる。
実体験より、主人公とともにした自分の体験を客観的に見ることができる利点がある。

・絵本は子どもたちの生きる上でのモデルとなるものでもある。
自分たちが生きる世界の文化の様相、社会がよしとしている価値観など、その真髄を分かり易く伝えることのできるものである。

・絵本は子どもたちを楽しませるもの。

絵本は、そこにあるままでは単なる物にすぎない。子どもの成長に寄り添う絵本は、子どもへの理解とともに読まれることで、初めてその意味を持ち輝きを増す。そして、「基本的に子どもたちに『この世は生きるに値するんだ』ということを伝えるのが自分たちの仕事の根幹になければいけないと思ってきた」という、宮崎駿監督の引退の言葉にあったように、絵本の根幹にもまた、

子どもたちに「この世界は生きるに値する」ことを語り伝えていくものがなければならないだろう。